

二人の会話

～ 第三版 ～

ひとりのワレンベルグ症候群患者として、自分自身の心の葛藤を寸話として表してみました。

同じ症状で悩んでいる仲間の皆さんの何かのお役に立てば幸いです。



作: 工 坊

- 1 お話し合いの開始
- 2 騒々しいW君
- 3 W君の輪郭
- 4 湿度とW君
- 5 自然に敏感
- 6 仲良くする方法
- 7 Oの悟り
- 8 Oの覚悟
- 9 可愛いW
- 10 遠慮してほしいとき
- 11 天子がくれた時間
- 12 泣く子とWには勝てない
- 13 人生の味付け
- 14 荒療治
- 15 持久戦宣言
- 16 お蔭様
- 17 Nの存在
- 18 それどころではない
- 19 粹な別れをしたい
- 20 Wの反撃
- 21 図に乗りやすいW
- 22 宿題の答え
- 23 一心同体
- 24 宿題の中間回答
- 25 ぼちぼち行きましょう
- 26 トモにも色々
- 27 心のビタミン剤
- 28 石の上にも三年以上
- 29 自動制御
- 30 心のバランス
- 31 自分のおかげ
- 32 つかず離れず
- 33 道するべ

二人の会話のまえがき

この寸話は、私がまだ自分の後遺症と向き合うことができずに苦しんでいた時から始めました。また、今でも時として素直に向き合うことができなくなる現在でも継続しようとしています。

年代相応の身の回りに起こることを経験して、一息ついたときに自分の身に起きた脳幹梗塞。それまでの自分は、企業の中でも結構恵まれていた存在でした。同時に、自分なりの野心も多少は抱いていました。

発症してからは、身に起きたことが信じられず、そして、再起を果たそうと気は焦るものの、それと相反するように、いつまでも完治しない症状に落胆し、自分が今何のために息をしているのか？ 今日は何をしようとしているのか？

朝起きてから、眠りにつくまで、四六時中続く感覚神経不全からくる半身の痺れ、完全徹夜明けの朝のような所在不明といった感覚の自分自身。こんな自分はいったい将来どうなってしまうのか？

何かにすがらないと、このような自分を律することができず精神的な病を招くようで恐ろしくなるのでした。

幸いにして、判断力や運動神経的な障害は少なかったため、病院から頂いた一冊の本の記事を手掛かりに、自分を律するのは、自分しかない。患者は自分自身の良き科学者になれ。との言葉をそのまま受け入れました。

今ここで感ずることを言葉として、漫才風?に表現することで、気が休まる思いを見いだせたのです。

正常な感覚の右半身の自分が思うことよりも、不具合をもつ左側の自分『W』に言葉を持たせることを通じて律する役目をもつ自分自身『O』を問うという試みを続けているのです。

この寸話は、私自身『O』が存在するまで続けようと思っています。

2011. 7. 10
 第三版 2017. 2. 22
 2019. 9. 21

二人の会話（1）

登場人物 W氏(ワレンベルグ氏)

N氏(ノーマル氏)

O氏(私オーナー)

O 『今日は暖かいね。二人とも仲良くしてくれよ。』

N 『Wがいつまでも騒いでいるから、ご主人が元気になれないだろうが!!バカ!』

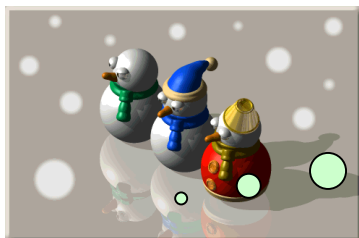
W 『そう言うなよ。俺だって、世間体があるんだ。そう易々と引っ込む訳には行かないんだ。』

N 『そう意地ばかり張らないで。もうそろそろ、遠慮したらどうだ。』

W 『そもそも、Nが1人でやってきたから、俺が来る羽目になったんだ。』

N 『なに言ってんだ。俺は生まれたときからご主人のそれこそ、右腕なんだ。休むわけにはいかなかったんだ。』

W 『そうやって、いきがるんじゃないよ。だから、俺がお前を少し休むような心境にさせてやったんだろうが。』



大体俺たちウマが合うはずがないのだ！
先が思いやられるなあ・・・

N氏は、早々に会話からはいなくなります。

O氏がN氏と区分できないから・・・

二人の会話（2）

O 『最近、Wが騒々しいね。特に雨降りの前や当日は。
お前は雨男か？』

W 『雨は好きじゃないけど、妙に落ち着いてじっくりと
ご主人と話ができるのがいいなあ。』

N 『お前は、もう話さなくていい！これから梅雨時、遠慮
したらどうだ。』

W 『遠慮なんか出来ないよ！ご主人次第さ。俺の騒々し
さは！Nにとっても、俺は必要だよ。』

N 『なに言ってんだ。確かに俺にとっても、Wは必要か
もね。付き合いたくないけどね。』

W 『・・・・・・・・・・・・・・・・』

O 『・・・・・・・・・・・・・・・・』



二人の会話（3）

O 『どうもW、お前の姿が最近になり、やっと輪郭がはっきりしてきたみたいだなあ。』

W 『オーナー、ご主人。まあ、俺もお前さんとの付き合いが結構長くなりそうだし、そろそろ、姿をはっきり浮かび上げさせてやろうかと思ってね。』

O 『それって、お前と晴れて” さよなら” できることか！期待していいのか？！』

W 『オーナー、ちょっと、それは早合点かもよ。何せ俺自身が、分からないし、他のオーナーに取り付いた仲間も、個性があるようだし・・・。』

N 『オーナー、こいつに何言っても、当てにならないよ。俺達が二人で協力して、追い出さないといつまでも居座る気にいるんじゃないかあ。』

W 『また、点取り虫のNの登場か。又来るから、楽しみにしているよ。』



二人の会話（４）

- O『今日は、湿度が高いようで、W、お前よく騒ぐよなあ・・・。』
- W『Oにとっては、初めての体験だものね。寒いときや乾燥している時の俺の仕草と、また一味違うでしょう?! 楽しんでる?』
- O『冗談じゃない!! お前との付き合い方をマジに悩んでいるんだ! 楽しむ余裕なんかあるものか!!』
- W『これは失礼しましたね。でもね、季節の移ろいや気候など、外気に敏感になるでしょう。より自然の暖かさや空気の流れをそれこそ肌で感じるセンサーを持たせてあげたのかもしれないよ。今まで、気づかなかったでしょ。』
- O『それは、お前の言うとおりにだなあ。今まで、そんなこと感ずる余裕も無く時を過ごしていたよ。』
- W『ご主人も段々と大人になってきたかな? Nとの付き合いだけでは絶対に味わえないよ。この夏も新しい体験が出来るよ。きっと・・・。』
- O『・・・・・・・・・・・・・・・・』



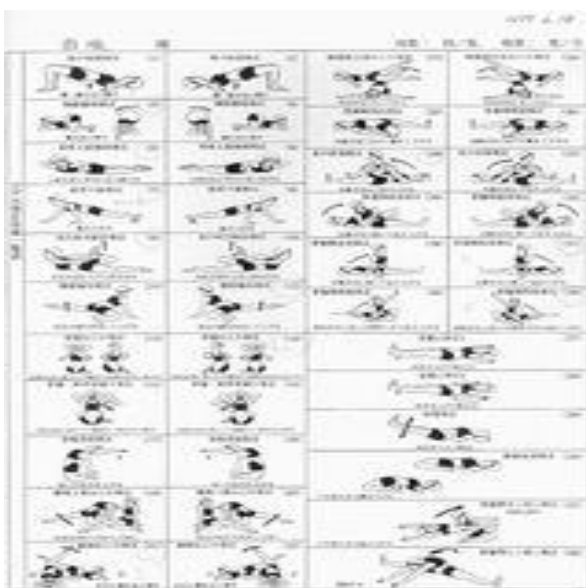
二人の会話（5）

- W 『♪しとしとピッチャン。しとピッチャン。
♪いよいよ、自分との対話時間がじっくりと持
てそうですね。ご主人様!!』
- O 『受けて立ってやろうじゃないか!お前ごときに、
負けてたまるか!』
- W 『やけに、元気いいじゃない? 俺との付き合い方
を、少し覚えてきたかなあ?』
- O 『そうでもないが、お前のいいところもあるだろ
うと思うように努力しているのさ。』
- W 『何々、俺のいい所を探しているのかあ。沢山あ
りすぎて言い切れないだろ?!』
- O 『囟に乗るな!! お前と付き合って、道端の花や季
節の移ろいは肌で感じたね。また、自分を取り
巻く人々の大切さは改めて感じたね。』
- W 『そうだろう。俺のありがたさは、マダマダ出て
くるはずだ。次回までの宿題にするから。よく
整理しておくように。』
- O 『主従逆転は許さんぞ!生意気な!! 』



二人の会話（6）

- W 『今日はいつものご主人と違うようですなあ?何か良い事があったの?』
- O 『そう言えば、言えるかもね。Wの存在が自然にNの負担になっていて俺から見ると、お前の騒ぎが大きくなったと誤解している点もあると分かったのさ。』
- W 『そんなに、もったいぶらないで教えてよ! 今後の活動の指針にするから。』
- O 『お前の活動の指針にされたらたまらんよ。』
- N 『Wよ。Nとしての俺は、嫌いだといってもW、お前のことを自然にサポートしていたのさ。それで、Oが知恵が無いから、失礼! 初めてOに意見してしまったよお。俺を酷使していることを気づかずに、結局O全体のバランスを崩しているのさ。この全体のバランスの崩れが、より不定愁訴を呼んでいるんだ。Oの場合は、特に右首筋と肩の強いシコリ感と雑踏の多い外出時のパニック症に近いもの。』
- O 『今日、主治医の先生からの紹介状を手にして、漢方に詳しい先生の所へ行って、身体の歪みと筋肉バランスについて矯正体操なるものを教えてもらったのさ。漢方薬も始めるよ。効果があるかは、なんとも言えないけどね。』
- W 『何か脅威を感じるなあ。お願いだから見捨てないで。』



二人の会話（7）

○『やはり、梅雨の空の下では結構Wは、はしゃぐねえ。
元気があってうらやましいよ。』

W『あっ。それって、皮肉？まあ、寒いのも騒ぎやすい
けど、湿度や発汗の具合にも結構、ハシヤギ具合が
変化するので、飽きないでしょう？
ねえ、オーナー？！』

○『お前に時間をやるから言いたい事を全部言えよ！
黙って聞いてやるから。』

W『そう開き直られると、中々言えないんだな。これ
が・・・。あつと、一部はしゃべってしまった。ウカ
ツ！』

○『結局はお前の言いたいのは、俺自身が悟るまでは、
具体的には、何も言わないつもりなんだな？！』

W『・・・・・・・・・・・・・・・・』



二人の会話（8）

- W 『最近は、暖かい日が多いので俺の騒ぎ方も比較的静かでしょう？オーナ？』
- O 『そうだなあ。漢方薬を処方していただいているドクターからは、脳梗塞という言葉は暫し忘れて、たまたま怪我をしたために、大きな痺れが残っている。と自分に言い聞かせた方が気分的に楽になる。と言われたね。』
- W 『俺もその方が長い付き合いが出来ると思うよ。』
- O 『お前とは長い付き合いなどしたくない！！後は自分の全身の筋肉バランスの維持が、肝心だな。懸垂はWと付き合う前から朝起き掛けにやっていたのだけど、これはドクターから止められた。急激に血圧を上昇を伴うので、血管へのリスクは避けるべきだとね。この辺は単なる怪我とは違う配慮が必要だとね。』
- W 『それは、気の毒なことですね。Oが二十年以上もやっていた縄跳びもだめかなあ。』
- O 『時間的にスローな運動が良いみたいだなあ。短時間にこなす行為は運動も仕事も控えた方が利口だということらしいね。』
- W 『それでも、日常では結構ありえるよねえ。』
- O 『そうなんだよ。俺が気になっているのは、車の長距離運転だね。オートキャンプに行くのもキャンプ場が、辺鄙な所で車が主体となっているし、丹沢の低い山登りや墓参りなどは年寄りの親など家族の都合もあるので、車での移動が常だったからね。本当に困っているよ。』
- W 『。。。。。。。。』



二人の会話（9）

○『いやはや、昨日は暑かったなあ。エアコンは使わないので蒸し風呂だった。』

W『どうですか？ご主人。低温サウナと俺の関係は味わえたかなあ？』

○『そうねえ。午前中のプールのリハビリ活動もあり、お前の騒ぎ方もあまり気にならなかった。それでも、左側は暑いという感覚は乏しく、肌が濡れているという感覚なんだけど、やっぱり、ピリピリする様なイラツク感じだな。』

W『なかなか、一様に表現できないところが、俺の良いところなんだ。』

○『お前の俺の感覚を逆なでるような態度は、一切良いところなんか何も無い！！』

W『ところで、漢方薬はどうかね。効いてる？』

○『今のところ、何とも言えないけど、Wの核というか左腰の付け根部分のドライアイスは多少痒いような感覚になるときがあるよ。冷たい痺れ感覚より、痒い方がWが可愛く見えるからね。』

W『そうかあ。俺が可愛く見えるようでは立つ瀬がないからなあ。あまり痒くならないで欲しい！』

○『お前の言う事なんか一切聞かないぞ！！』



二人の会話（10）

- O『今日は、PCのサポート中、結構騒いだなあ。ああいう時は、ちょっと静かにしてね。』
- W『Oも結構頑張ったよね。お客さん対応何とか、こなしていたじゃん？』
- O『そうだよ。たまたま、持ち回りの店長役だったからねえ。』
- W『まあ、せいぜい気張んなよ。その方がOの為にもなると思うよ。俺との付き合い方も場数をこなす必要があるんじゃないかなあ。天気も変化するし、気温や湿度、それに汗のかき具合が、そこはかたくブレンドされることが、俺の味の良さだからなあ。』
- O『お前がコーヒーのような良い香りを発してくれるならば、大いに歓迎したいところだけどねえ。』
- W『俺とコーヒーを比較されては困るなあ。俺のほうが人生の苦味と奥ゆかしさをOに与えているんだからなあ。』



二人の会話（11）

- 『Wよ。お前、最近、暖かさの為か、それとも慣れのせい
か、騒ぎ方が幾分おとなしくなってきたようだなあ。』
- W『そんなことは無いと思うよ。俺の発生元はまだ、無く
なっている訳ではないからね。何せ現代の医学では死滅
した神経細胞の回復薬はないし、また代替機能も明確に
はされていないからね。』
- 『お前のそのような理屈話は聞きたくないんだ。自分とし
ては理解していても棺桶に入るまで、お前とさよならで
きないなんて思いたくも無いからね。』
- W『だから、お前さんとしてはどうするの？ということが肝
心なのね。大分大人になったようだなあ。』
- 『Wは、言ってみればニコラス・ケイジ主演映画の天子の
くれた時間の強盗役のつもりか？』
- W『Oもたまには良いこと言うじゃん。じっくりと考える時
間は、まだ俺が授けるよ。』
- 『。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 』



二人の会話（12）

○『いやはや、今日は暑かった。Wよ、お前随分騒いだなあ。やはり暑さと寝不足はお前が元気になるビタミン剤のようだなあ。』

W『何せ毎日、○の可愛い二番目の孫の泣き声で刺激されてるからな。』

○『神経的には、結構きついところもあるね。熱帯夜付き寝不足リハビリというところかね。』

W『神経的な安らぎや肌のすべすべ感などと反対なことが俺が元気になる要素みたい。』

○『W、お前の本音を俺にばらしても良いのか？心頭滅却すれば火もまた涼しなど、と聖人君子じゃなけりや務まらないよ。』

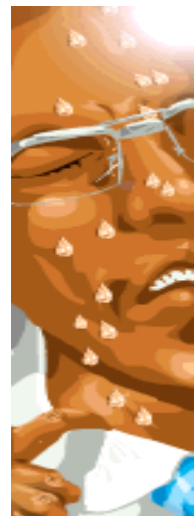
W『そりゃそうだ、お前さんは動物だ。いつも機械仕掛けの冷静さなんか保たれないよ。だから、俺の出番があるのさ！』

○『Wを寄せ付けないような沈着冷静さ、自分自身の今を見続ける心、どこかの先生ご推薦の自己催眠的ボディスキンのトレーニング等々大人になれない自分が歯がゆい！！』

W『おいおい、そう自分をいじめるなよ。お前は良く頑張ってるよ。出来ることは何でも試してみようとしているじゃないか。』

○『何で俺がお前から慰められるわけ??』

W『。。。。。。。。。。。。。。。。。。。。』



二人の会話 (13)

- 『いやはや暑い！！エアコン二台稼働の電気容量無く、自分の部屋は低温サウナ並み。自分の発汗とWとの症状の検証体験にはもってこいの環境。ウ～～ン。うなるほど不快。』
- W『いや、○さんよ。どう？頑張っているじゃないの。夏の俺の姿を十分に味わってくれ！』
- 『お前の仕業って、すごく人生経験にとって、味付けになるな。これは皮肉だぞ。』
- W『おやまあ。ついに○も皮肉を言えるほどに成長したか！結構、結構。』
- 『しかしお前って、相当にしつこい野郎だなあ。特に俺の左足全体の影響力は、いつまでたっても弱まらないなあ。いい加減に遠慮しろよ、この野郎！』
- W『まあまあ、そういきり立つなよ。症状に余計に出るぞ。どうですか、本気になって、人生やり直してみれば？』
- 『何言ってるんだ。お前になんか言われたくない！お前の存在が、どれだけ俺に影響を与えているのか、判ってるのか！』
- W『おいおい、またまた、いきり立ち屋の○さんのご登場か。もうちょっと、大人になる必要がありそうですねえ。』
- 『・・・・・・・・・・・・・・・・』



二人の会話(14)

- O『ちょっと、最近自分とW、お前の立場についてゆっくりと
考えられる余裕が出てきたようだ。』
- W『ご主人、それって俺の存在が薄れてきたってこと?すごく
寂しいんだけど。。』
- O『そうではないんだ。お前の存在は、残念ながら俺の気に
障ってしょうがない程健在だよ。それでも、少しずつお前
を空気のように感じ始めている自分も少しずつ現れてきた
ようなんだ。』
- W『空気か。。もともとは、ご主人を離れて、俺自身は存在し
ない。せめて、空気みたく軽くない水のような存在はどう
かなあ。』
- O『水はいい表現だ。いまだに、痺れ水が左腰から湧き出て、
左手の甲へとまた、左足全体へ流れている。シャワーを浴
びる時などこの痺れ水も、左足の指先から少しずつ流れ落
ちることをイメージしているよ。』
- W『ところで、最近のOの半分やけのような荒治療はどうなの
よ。俺の存在を消し去れるほどすっきりするのか??』
- O『お前の質問などに答えたくもないが、自分を信じてやって
いるだけだよ。鍼にしても、漢方薬にしても、自作の磁気
ネックレスにしても、効くんだと自分に念じているだけだ
よ。時間がかかっても、元の自分を取り戻すからな。覚悟
しているよ。』
- W『そういうことね。さよならできる日を楽しみにしているよ。
当分先だと思うけどねえ。』



二人の会話(15)

- O『Wよ、そろそろお前と仲良くやっていかなければならないという覚悟みたいなものが俺にも芽生え始めたよ。』
- W『ご主人も一年かかって、やっと大人になってきたようだねえ。俺との付き合いというのは 敵のように感じてくれている、余計にO自身の気に障ることではないんだ。』
- O『どうも、お前の言うとおりの様だなあ。それでも、お前の姿がはっきりとしてきたような 感覚が俺にもゆとりを与えているということも事実だ。相手の姿が見えないくらい不気味なものもないからなあ。』
- W『そうか、それもそうかも知れないね。同時に俺の仕草の癖みたいなものの理解も時がOに少しずつ気づかせているのかもしれないね。』
- O『それでも俺自身は、W、お前をいつまでも許しておくつもりも無いよ。これからは、より 長期間の持久戦に持ち込んでゆくからな。』
- W『大いに、結構ですよ。受けて立とうじゃないの。』



二人の会話（16）

- 『いやー、W久しぶりだね。おまえが大分静かというか、日によって騒いだり騒がなかったりするの、多少気持ちが楽になってきたよ。会社にも行き始めて、毎日のリズムが少しずつ身についてきたようだ。』
- W『ご主人、ずいぶん大人になった感じがするねえ。俺はあなたに色々な事を教えてきたよなあ。感謝しとるかねえ？』
- 『あまり感謝は、してないが、色々と考えさせてはもらってきたね。お蔭様でなんて言いたくは無いんだけどね。』
- W『でもまだ、当分は付き合っただけだよ。わかってるね。』
- 『お前の言い方は、心得てきたよ。俺は、ジュディオングさんのCMのせりふじゃないけど、ネバー・ギブ・アップで行くからな！徹底的に付き合っただけだよ。これからも、よろしく・・・』



二人の会話（17）

- 『大分寒くなってきたなあ。去年のような暴れ方はしないでくれよなあ。』
- W『やあ、ご主人。久しぶりじゃないの。元気してる？』
- 『お前の存在が少しずつ客観視できるようになってきたよ。もっとも、長い時間かかっているけどね。』
- W『俺と付き合い始めて、もう十三ヶ月か。。長くもあり、また短くもあるかな？』
- 『お前も俺の分身だから、よく俺のことを理解しているようだね。』
- W『そりゃそうさ！そろそろ、ご無沙汰のNとも仲直りしなくちゃなあ。。』
- 『まだまだ、ちょっと難しいかもね。Nはともかく律儀だから。そう安々とは、お前のことは許さないと思うよ。』
- W『Nも少しは丸くなったんじゃないの？』
- 『俺は、必ずしも簡単に丸くなってほしくは無いんだよ。』
- W『お前さんの言うことは、なんとなく矛盾しているように聞こえるよ。』
- 『俺は性格の違う二人の面倒を見てるんだ。難しい立場なんだ。』
- W『俺にはちっともわかんないや。またくるよ！！』

これからも宜しくね。
仲良くいきましょうね。



二人の会話 (18)

W 『よう、久しぶり。ねえ、オーナーたまにはお話ししようよ!』

O 『お前と話している暇がない!! 孫たちの風邪がひどく、下のかわいいユリちゃんが入院騒ぎ。勝手にしてろ!!』

W 『少しでいいから、時間作ってよ!!』

O 『うるさいやつだな、それどころではない。と言ってるだろ! 静かにしろ!!』

W 『・・・・・・・・』



二人の会話（19）

W『久しぶりですね。オーナー!!』

O『Wも中々どうして根気のある奴だねえ。』

W『最近、Oが自分のことを忘れよう々としているのが寂しくて・・・』

O『お前に寂しがられるのは俺には都合がよいのだけれど・・・』

W『そんなこと言わないで、また一緒に仲良くしようよ!』

O『気持ち悪いな!!あっち行けよ!!』

W『そんな、ご無体な!!』

O『石原裕次郎の歌のせりふではないけれど、粹な別れをしようぜ・
・』

W『Oも随分年寄りくさいねえ・・・ヤダヤダ』

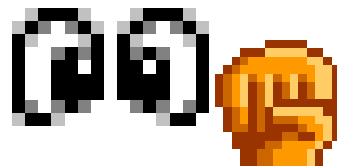
O『お前という奴は・・・決して人生の伴侶にはしたくないんだけど
なあ・・・』

W『・・・』

O『まあ、いいや。もうちょっと付いて来いよ・・・』

W『だから好きさ・・・オーナーちゃん!!』

O『ため息が出てくるねえ・・・』



二人の会話（20）

- 『いやはや、参ったねー、少しがん張りすぎたかなあ・・・お前が一気に反撃に出てきたようだなあ。』
- W『そうですね。そんなに甘くないよお。ご主人。』
- 『リハビリのためと思ってお前を追い出そうと励んだんだがなあ。』
- W『少しずつやったら。長い付き合いなんだからさあ。焦るなよ・』
- 『それでもなあ。こっちも疲れるよ。早く、自分自身のモチベーションを上げたいんだ。』
- W『なるほどねえ。気持ちはよーく分かるよ・・・』
- 『よーく分かるなんて。よーく言うねえ。・・・』



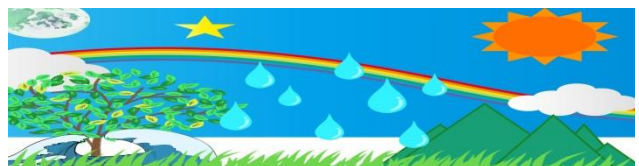
二人の会話（21）

- O 『最近になり、Wの元気が復活したようだなあ・・・どうなってるの??』
- W 『俺にもわからないよおー。それでもちょっとずつ顔つきが違ってきてるだろ?』
- O 『そうねえ。昔ほどの雪だるまではないけれど、芯みみたいなものが見え隠れしている感じかなあ』
- W 『俺がさよならする間際の、そう魑の最後っ屁になってほしいのでしょうか?違うかな?』
- O 『その通り!! ともかくお前の存在は気に障ってしょうがないんだ!!』
- W 『ほらほら、イラつくと益々、俺は凶に乗るのが得意なんだよ。長い付き合いなのにまだ分からないの?』
- O 『お前は、俺にあきらめろとでも言うのか!!』
- W 『まあまあ、抑えて々・・・時が解決すると思うよ。』
- O 『またもや、お前に慰められている自分が悲しいよ。』
- W 『なんて言ったらいいのでしょうかねえ・・・よしよし・・・』



二人の会話（２２）

- 『随分前にWよ、お前から宿題をもらったよね。覚えている？』
- W『覚えてるよ。俺がご主人の為になっているということだよね。そして、どれだけお世話しているか、纏めておくように、言ったよなあ。』
- 『そのことだけど、よく覚えてるねえ。』
- W『俺は、人から頼まれたことは、すぐ忘れるという。また、忘れても一向に気にしないんだけど、人をお願いしたことだけはいつまでも覚えている性格なんだ。良い性格でしょう。』
- 『だから、それ以上悪くならないんだ。お前の生き方か？』
- W『そうだよ。人間は生き物。機械じゃないんだ。お天道様や雨風の中で暮らしてんだ。いつも機械的な対応なんて、真っ平ごめんだ!!ほかの動物と変わらないんだよ。そのことを、皆忘れすぎてないかなあ??人間のおごりと言うやつさ。』
- 『そうだよなあ。何のために時間を惜しんで互いに鍛えあっているのかなあ。』
- W『鍛えあっているなんて、他の動物から見たら、本当のアホにしか写らないよ。きっと。』
- 『人間も、自然界の一員。自然の掟を破っていたら、長続きしないよね。』
- W『当たり前だよ。それでも、他の動物を巻き込むから、余計始末に終わらないよなあ。きっと、天罰が下るよね。』
- 『うーむ・・・』
- W『おいおい、唸るなよ。ところで、宿題の答えは??』
- 『うーむ・・・うーむ。・・・またね。』



二人の会話（23）

- 『Wよ。最近思うんだけど、お前との付き合いは棺桶に入るまで続くのかなあ？』
- W『ご主人。それは何とも言えないなあ。何でそんなことを今更聞くのかなあ・』
- 『俺も、最近疲れてきたよ。』
- W『こっちも同じさあ。』
- 『何言ってんだよお。お前はただ俺に取り付いているだけだろが！』
- W『分かってないねえ。あなたは・マダマダ未熟者め！！』
- 『いいか。俺を呼んだのは、そもそもOよ。お前だろうが！！』
- 『ご主人をつかまえて、呼び捨てにしたなあ！コノヤロー！』
- W『喧嘩を売ろうて一の？』
- 『おー！その通りさ！！』
- W『どうやって？？うん？』
- 『右腕で左を叩いてみたところでかわいそうなだけだなあ・・自分が』
- W『そうだろう・・ご主人よ、あまり自分を責めるなよ。俺のことを早く追い出そうと、ジムに行ったり、薬飲んだり。ご苦労様だよ。。』
- 『悲しいけれど、またお前に慰められたなあ。』
- W『俺達は一心同体さ！！楽しく行こうよ！！ランランラン・・』
- 『ほんとにお前は、のん気だよなあ・・でもちょっと最近かわいらしくなってきた気もしてるよ。内緒だけど・・・』
- W『今なんか言った？？』
- 『何にも言ってないよーだ。』



二人の会話(24)

- 『Wよ、お前と話すのも久しぶりだなあ。』
- W『そうだよねえ。Oの気持ちに何か変化があったのかな？』
- 『そうねえ、今でもお前は相変わらずに、俺に付きまとっているんだけど、少しずつ慣れてきたね。今年は付き合いだしてから3回目の冬だけど、去年よりも、そして一昨年よりもずっと、うまく付き合っているような気がするよ。』
- W『いやー。それは何よりですね。ご主人。あんたも少しずつではあるものの、俺の奥ゆかしさを理解してきたのかなあ？』
- 『お前の奥ゆかしさというのは、言い過ぎの感もあるけれど、色々と考えさせられてきたことだけは本当だな。』
- W『どんなことを、考えてきたのかなあ？』
- 『一番目は、お前とずっと将来にわたって付き合うことばかり考えていたら、気がおかしくなりそうだった。このことを何とか乗り切ってきたことで我ながら忍耐力と妙な自信はついたね。二番目は、何か自分自身の行動の背景とその目的を自分で見つけて自分自身に言い聞かせないと、お前の苦痛の中でただ息をしている動物になってしまうような恐怖感があったね。この恐怖感というやつが、大げさに言えば、自分自身の《今》の生き方と気構えを半ばガムシヤラにでも掴まざる終えないような衝動となって自分に帰ってきたんだ。』
- W『そのことが、このように二人の会話として綴ってきたエンジンにもなっている訳だ。』
- 『その通り！ やっとお前と意見の一致をみたなあ。そして、マダマダ自分を鍛錬することは一杯あるだろうし、自分ではどうしようもないような山坂もたくさんあるような気がするよ。』
- W『大丈夫だよ。俺がついているからね。』
- 『あ～あ。喜んでいいのか、悲しんでいいのか。』



二人の会話（25）

○『お久しぶりですね。元気ですか？』

W『あれ、ご主人から声を掛けてくれるなんて、どういう風の吹き回しかなあ？』

○『寒くなってきた最近になってようやく、自分の左手で右手のほうがあったかいなあ・・・とを感じるようになったんだよ。』

W『それは、おめでとうございます。左手の温度感覚異常だから、右手では左手が冷たいと感じても、左手では右手の温かさは感じないよなあ。』

○『自分の血流が、やはり左側が右側に比べて悪いことを客観的に感じられるようになった。』

W『脳幹というのは、やはり血流の制御にも関わってくるんだね。俺の威力は自分でも判らんよ・・・』

○『Wよ。お前との付き合いも、結構長くなるみたいだから、気長にそして気楽に考えるようにするよ。最初の頃に読んだ、[心と治癒力](#)の本のジョン・カバト・ジン博士の言葉を思い出しているよ。患者は自分の心と身体のみよき科学者でありなさいとね。』

W『ご主人もやっと、此の頃腹が据わってきたね。俺と徹底的に付き合いと言う姿勢だね。』

○『そのとおり。お前と言う存在が、俺にどれだけのことをしてくれているか。見方が変わってきたような気がするよ。』

W『やっと、そういう心境になってくれたのか・・・涙が出てくるよ・・・』

○『まあ、ぼちぼちと行きましようね。お互いにね。』



二人の会話（26）

O 『いやー! 暫く・・・相変わらずシッカリと生きていますね。』

W 『何ですかー。その無礼な挨拶は・・・馬鹿にするつもりか!!』

O 『そんなに怒るなよお。俺とお前の仲だろうが・・・』

W 『付き合いにもちゃんとした節操があるのを知らないのかあ?!・・・』

O 『そうでしたね。やっと最近になって、Wを生涯の智の様に感じてきたよ。トモの字が違った?!』

W 『ずいぶんOとあろうものが、下手に出てきたねえ。何か企んでるの? ああ、それと字は間違っではないないかもよ。お供よりはまじだよ。』

O 『あのねー、トモにも色々あるもんだ。鞍もいいかもしれないなあ。』

W 『何で俺が、矢を引くときの左手に当てる手袋なんだ??』

O 『それはだなあ。ここ一番と云う時に登場してくれる役割だからだよ。』

W 『嬉しい事を言ってくれるではないか。同士!!』

O 『大分ご機嫌が良くなってきましたかね。ウン?? (ちょっとした一言が効き目がある奴のようだなあ・・・それでも、いつでも同じ態度だといいいんだけどなあ。)』



人の会話(27)

- 『Wよ、半年ぶりだね。寒くなってお前の存在が実感する時期になってきたなあ。』
- W『やっぱり、ほとんど口も聞かなくなったNの存在との比較がてぎるのかな?』
- 『そうね・・・唯一、ほかの人から見てわかる症状が、両手の冷たさの相違だね。夏場などは、触ってもらっても分からないけど、寒くなると実感してくれる。』
- W『この血の巡りの左右の相違というやつは、感覚障害というものの、物理的な俺の成せるわざだよなあ・・・』
- 『それでもなあ・・・ビタミン剤はいいみたいだねえ。。ワールドウィングのリハ ビリとビタミン剤でごまかしてゆくしかないかもなあ・・・』
- W『それでも、薬のビタミン剤にはならないまでも、俺の存在もお前さんを随分考えさせただろう。心のビタミン剤の補給という観点でだよ。』
- 『そうねえ。その関連の勉強は自分にはなかったからなあ。人の生き方みたいなものに興味を持ったし、生涯学習なんて言葉も興味を抱くようになったね。』
- W『そうだろう。もっと広く世間を見るためには、お前さんもまだまだだと思っよ・・・』
- 『W、お前の言うとおりのようだね。何か素直になってきた感じがするよなあ・・・』
- W『お互い様だよ。』



二人の会話(28)

○『早いもので、お前と付き合って三年を過ぎたなあ。石の上にも三年以上。お前のことだよ。』

W『いやはや、よく付き合っている俺はずいぶんと我慢強いよなあ。我ながら感心するよ。』

○『自分で褒めてるよおー。やな奴よのおー。おぬしは・・・』

W『あれ・・・俺に対して冗談言える余裕が出てきたのか。おぬしは?』

○『冗談ぐらい言えないと付き合いきれないからさあ。しつこすぎてな。最近には本当にお前の姿がはっきりしてきて、時期的なものもあり、特に左手と右手の温度差をもろに感じるね。それでいて、普通の怪我をしたときの自分の痛さを感じるとような妙に客観的な姿としてお前を捉えられる自分がいるようになった。年中徹夜明けのようなボワーツとした心ここにあらずのような感覚は薄らいできたね。』

W『ほー。。ずいぶん俺の姿を克明に表現してくれているではないか。おぬし。。』

○『まあ。俺のほうも腹が据わってきたね。それでも、リハビリはネバー・ギブアップで続けるよ。お前を完全に放り出してやるまで、続けるぞ!!』

W『あーあ! かんじゃってもう・・・』



二人の会話（29）

- O『ひさしぶりですね。お前と漫才するのも。。』
- W『その言い方はないんじゃないの！？俺の方はいつもまじめに話してんだよ。』
- O『いやいや、失礼。今日は、お前のいやな症状を遅ればせながら、違った角度で捉えてみたのさ。』
- W『なんだよ、それ。俺を少しは味方だと思うようになってきた訳??』
- O『そうね。まず、頭の芯が未だに、ふら付くような。心ここにあらずのような。徹夜明けのショボショボした感覚が残っているんだけど、これって痺れ以上にモチベーションを下げる要素なんだよ。この感覚を味方として考えようとしているんだ。モチベーションは自然に上がるように、お前がわざと、俺の健康維持のための制御をしてくれているんだ、と解釈すればいいと納得させているんだ。自分自身をね。いつか、解放すときが来るか否かは、俺に取り付いたおまえ自身にも分からないんだよね。』
- W『泣かせる台詞をはくもんだね。大丈夫だよ、しっかりこれからもご主人様を制御しますよ。任せてくれよ。』
- O『お前の意気込みには、負けるよね。あーあ、言うんじゃないかった。』
- W『今なんか言った！？』



二人の会話（30）

W 『蒸し暑い日が続いているけれど、どうかね。最近は？』

O 『久しぶりだね。お前がそばにいることは、四六時中感じているけれど、そんなものかなあ。って割り切り始めている。もう早いもので、お前と付き合い始めて、四年近くになろうとしているね。』

W 『それで、俺の感覚は変わってきたのか？』

O 『相変わらずだけど、大分モチベーションは上がってきている。それでも、中枢神経という奴は、なかなか言うに言えない苛立たしさは付き纏っているよね。お前のことだけだね。』

O 『一番つらい左股関節からの痺れが少しずつ下のほうに下がってはいるものの、毎朝の目覚めのときに、痺れが無くなっていたら、どんなにすっきりするだろうかなんて。。弱音を吐きたくなるときもあるよ。』

W 『そうかあ。ずっと、引きずっているんだね。』

O 『そうだよ。お前をずっと引きずっているよ。引きずるには、引っ張るだけの、体力もさることながら、気力が必要だ。』

O 『この気力という奴は、やはり俺自身の生きがいが必要だね。』

W 『お前さんの生きがいか。。』

O 『そう、誰も作ってくれない。自分自身でしか見出せない生きがいだね。』

W 『生きがいがあると、俺の症状は軽くなるの？』

O 『生きがいによって、お前の存在を客観視できる余裕ができるということだけだよ。』

W 『客観視って。。』

O 『この前、目の前に急に出てきた子供にぶつけまいと自転車で転んだときに、すりむいた膝の痛さのようなものさ。この痛さは、事故としての一過性的不具合ということ以外何者でもないよね。』

- W 『つまり、Oの言わんとすることは、生きがいがあれば、擦り傷と同じように俺を捉えることができるということか。』
- O 『そうだよ、中枢神経による不具合は、一過性では無いために、常にまとわり付いてくるから、心のバランスを取ることが必要なんだ。』
- W 『心のバランスねえ。』
- O 『そうさ、二人の会話もこの心のバランスをとるための機会なんだ。』
- W 『判ったような、判らないようなあ。』
- O 『・・・・・・・・』



二人の会話(31)

- W: 『二人の会話も長いことご無沙汰していました。0さん。元気か?』
- O: 『まあ、そこそこやってるよ。最近は、長く六年以上も付き合い合っていると、だんだんと自分の一部として気にしなくなるものだなあ。』
- W: 『俺の存在が薄れてくるのは、誠に淋しい限りだが、0の存在の上に生きている俺としては、よく付き合い合っていると思うよ。』
- O: 『初めて、お前と付き合い始めのころは、自分の精神が不安定になり、狂ってしまうのではないかと、自分自身のコントロールができず、このような会話を始めたわけだ。こうやってPCに向かって、こんな言葉を綴っているが、Wの存在は左足にいつも感じているよ。』
- W: 『いつも感じていてくれるのは、嬉しいことを言ってくれるではないか。』
- O: 『お前のそういうセリフは聴きあきたよなあ。それでも、自分が無理をしそうになったときや、今この時を感じる時には、お前の姿に学ぶものがあるんだ。』
- W: 『ほう・・・俺に学ぶことがあるとな・・・?』
- O: 『そうだよ。今生きていること。ここにこうしているということ。最近も自分の周りには、悲しいことが起こったけれど、自分はどうして今この時を刻んでいるという確かさが、感じられるということだね。』
- W: 『なんか涙が出てくるセリフが0も言えるようになったんだ。成長したなあ。俺のおかげだね。』
- O: 『イエイエ、自分のおかげですよ。』

二人の会話(32)

- 0 『いやはや、時のたつのは早いもの。お前が俺の前に現れた2004年10月から、既に、12年目の付き合いとなった。今でも、俺の体調や季節の変わり目、特に湿度の高い時は、いまだにお前の活動力が増しているような感覚を味わっているよ。』
- W 『相変わらず0のお傍に置いていただいております。だいぶ前の会話だけど、0の人生にとって、俺の存在は結構大きかったんだろ？ 実際どうなの??』
- 0 『大きいなんてもんじゃないよ！ 自分自身と向き合った時間がW、お前の登場で桁違いに大きくなったと思うよ。』
- W 『こんな二人の会話と題して、漫才している俺たちも歳取ってきたよね。文字通り、この会話中は、0は自分自身と向き合っていることを示すわけだからなあ・・・』
- 0 『もしも、昔登場したNしかいない状況だったら、こんな会話していないよね。』
- W 『ということは・・・。0は猪突猛進の連鎖の中から抜け出していなかったということだよね。』
- 0 『この年になって、仮にWと初めて出会ったら、このような自分になっていたかどうか？きわめて自信がないね。つまり痛みと辛さのスパイスを感触として味わうものの、心が引きずられないようにと一定の距離を置く癖をつけるようなものかな・・・?』
- W 『俺たちの付き合いそのものだね。』
- 0 『その通り・・・だね。』

二人の会話(33)



O『いやはや、時のたつのは早いもの。お前と知り合ってから、既に15年目の付き合いとなった。今でも、季節の変わり目、特に湿度の高い時は、お前の活動力が健在だという感覚があるよ。』

W『相変わらずOのお傍に置いて頂いております。でも随分会話の機会が減ったと感じるよ。会話は減ったけれど、俺の存在はOの人生の道しるべになったんじゃないかと自負しているよ。』

O『最近はその言われ、コノヤロー!!という元気は無くなったね。確かに、いわゆる現役時代と言われるサラリーマン時代のからの早期シフトは、お前なしには実現しなかった。セカンドライフとしてのカウンセリングの世界で今まで知らなかった分野の方々とも友達になった。今はサードライフと勝手に名付けて地元の子供たちの学習支援活動中ってところだよ。』

W『そうかあ…。Oとしては、まずは自分流に何とかこなして生きてるってことかな。益々、俺と同様に細君も大切にしなきゃいかんぜよ!!』

O『相変わらず一言いうやつだなあ。もう一つお前との長年の付き合いからか、どうしても身体の左右のバランスを司る腰回りの筋肉の維持に課題が出てきて、補正が必要となり4か月程、理学療法士さんのリハビリに通ったよ。』

W『ということは……。俺が悪いのか…。申し訳ありません。』

O『今更謝ってもらってもどうしようもないけどね。今は歩く姿勢を意識して直すように努力中だよ。生まれつきの肩を揺すった努力しています。乞うご期待というところで、じゃあ、またね。』

>>>二人の会話は、Oが存在するまで続きます。



私の症状

- 病名:右延髄外側椎骨動脈解離による脳幹梗塞
(通称:ワレンベルグ症候群)
- 主な後遺症:左股関節以下左足全体の痺れと温感異常
および左手首先の冷たさ感覚並びに右肩の重いコリ感
(発症後の半年～1年間は、杖歩行、嚥下力低下、元気な
クシャミが出ない、風呂に入っても温水プールの感覚、
時として精神的な不安定さを味わう)などの不具合。
- 発症:2004年10月5日未明～発症から15年・・・



ホームページ『嗚呼ワレンベルグの鐘が鳴る』の(作者H.K.氏)作成図を借用



ワレンベルグの鐘が鳴る
(現在、HPは閉じられております。)

工房

<http://koubo.boy.jp>